

全国同人雑誌最優秀賞

第17回 まほろば賞 発表

二〇二一年からまほろば賞は全国同人雑誌協会と文芸思潮が主催することになりました。今後もこの形で進めさせていただきますので、どうぞよろしく願います。

第七回新全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」選考会は、二〇二三年七月九日にハドル・スペース自由が丘において、三田誠広氏、中上紀氏、小浜清志氏、五十嵐勉「文芸思潮」編集長の四名の選考委員によって慎重に審議が行なわれました。作品ごとに各選考委員が深く批評し、熱い議論が交わされました。厳正な審査の結果、左記のように決定いたしましたので、ここに選評とともに発表させていただきます。

また全国からの読者の投票と寄付による読者賞の投票および内容の結果も併せてここに掲載させていただきます。

一昨年からの「まほろば賞」は受賞作品には、賞状と賞金三十万円（賞金は主に寄付によるものです。また二人同時受賞の場合は、恐れ入りますが、一人二十万円とさせていただきます）および記念トロフィーを贈らせていただく

ことになりました。河林満賞にもそれぞれ賞状と賞金十万円と記念品を、また読者賞には投票賞金と優秀賞賞金五万円および記念品を贈らせていただきます。優秀賞にも記念品と賞金五万円を贈らせていただきます。

今後も全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈念し、たくさんの方の同人雑誌の作品が全国同人協会・全国同人雑誌振興会及び文芸思潮に寄せられてくることを期待しております。

また、どうぞ作品の推薦にもいつそう多数の方が御参加くださるようお願いいたします。また積極的に読者賞への投票に加わっていただき、ぜひ皆様自らの手でこの賞を盛り上げ、育てていただきたいと思います。全国の同人雑誌諸氏の御参加と御支持を切に願います。次第です。

またこの結果及び選評とその感想・批評の動画、また優秀作品はインターネット「文芸思潮」ホームページでも発表される予定です。どうぞ御覧ください。

第17回全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

「エリザベトを選んで」

〔白鴉〕 33号

蒔田あお

特別賞

「浜辺のリズ」

〔黄色い潜水艦〕 75号

藤本あずさ

河林満賞

「青山墓地の桜」

〔槇〕 45号

萩原紫香

五十嵐勉賞

「血の湯」

〔繫〕 3号

寺本親平

読者賞

「見返り」

〔季刊作家〕 100号

佐藤文平

「枯野」

〔季刊作家〕 100号

祖父江次郎

優秀賞

「白詰草」

〔季刊午前〕 60号 西田宣子

まほろば賞賞金は、木内是壽氏、故蘭藍子氏、三田村博史氏、故原石寛氏、夏目日美子氏、前岡光明氏、今田真理子氏、二宮英郷氏、堀井清氏、西島雅博氏、高橋惟文氏、勝又浩氏、越山しづか氏、「北斗」などの御寄付によるものです。ここに厚く御礼申し上げます。また「狐火」「安藝文学」「ペン」「海」「文芸中部」など文芸思潮同人誌団体会員の御協力にも厚く御礼申し上げます。

選評



みた まさひろ
1948 大阪生まれ
早稲田大学文学部卒
77「僕って何」で芥川賞受賞
作品はほかに「いちご同盟」
「空海」「親鸞」など
最近の本「遠き春の日々」
「少年空海アインシュタイン時
空を超える」「天海」「善鸞」
日本文藝家協会副理事長
武蔵野大学名誉教授

同人雑誌の充実ぶり

三田誠広

どの候補作も文章が安定していて作品としてのレベルが高く、昨今の同人誌の充実ぶりを実感できた。掲載順に感想を書く。「白詰草」(西田宣子)は二組の高齢者夫婦の日常を丹念に描いた佳品で、手並みが鮮やかで過不足がない。片方の妻と他方の夫が絵画を描く点で接点があるのだが、芸術小説という感じではなく、淡々とした日常が描かれる。画家の妻が病気になったり、孫の結婚の話が出てくる場面もあるのだが、それもありふれた日常風景にすぎない。小説としての盛り上がりには欠けるのだが、こういう

小説があってもいいと感じさせる。

候補作の中で異色と感じられたのは「血の湯」(寺本親平)で、平家琵琶や説教節を思わせる幻想の世界に読む者をいざなう不思議な作品だ。ストーリーのない散文詩的な展開で、独特の語り口で恐ろしいことが語られる。その文体の強度には驚かされるし、ユニークであるということは評価されなければならない。ただユニークすぎて理解が及ばないところがあることも確かで、五十嵐勉さんの強い推奨があったが、他の選考委員の賛同は得られなかったし、よく自身も強くは推せなかった。語り手が抱えている業のようなものもつと描かれていればと惜しまれる。

次の二作は同じ同人誌の掲載作で、妻のいない高齢者男性が二人ずつ出てくるという点でも共通している。ぼくも今年、後期高齢者になった。まだ妻は健在だが、もし一人きりになったらこういう状態になるのだろうか、身につまされる思いで読み進んだ。女性の方が長生きするので、男性の高齢者が一人取り残されるというのは少数派だろうが、それだけに悲慘さが際立つように思われる。二作とも男性高齢者の一人暮らしのわびしさが細部に渡って描き出されていて、逃れがたいリアリティーをもつて読者に迫っていく。「見返り」(佐藤文平)はテンポよくプロットが展開する秀作で、書き手の技術力の確かさが感じられる。最後に到って主人公の妻の過去が明かされるという仕掛け

があつて、そこが読みどころでもあるのだが、やや通俗的なオチになってしまった。「枯野」(祖父江次郎)は野良猫を飼う話や、競輪場の寂しい風景なども描かれるのだが、プロットというほどのものではなく、老人二人の哀れな末路が淡々と描かれる。救いのない独居老人のありのままの現実がつきつけられて息が詰まるようだ。けっして楽しい作品ではないが、これが純文学だと思わせる訴求力がある。

河林満賞を受けた「青山墓地の桜」(萩原紫香)は終戦直後の米兵の現地妻と、近所の少女の交流を描いたもので、おそらくその少女は書き手自身と重なるのだろう。世間から白眼視される立場の現地妻の女性も、英語ができるくらいだから育ちのよい人なのだろう。終戦直後の就職難の時代には、女性の仕事も限られていて、教養がありながら米兵相手のホステスや現地妻になる女性も少なくなかったはずだ。大人たちからは批判の対象となる現地妻の女性も、偏見のない少女の目には素敵なお姉さんと感じられる。そんなありのままの姿を少女の視点で素直に描いてみせた書き手の筆致に好感がもてる。それだけにそのお姉さんが胎児を宿したまま自殺を遂げる結末には痛切なものがある。受賞に相応しい見事な作品だ。終戦直後の東京の民家のよいうすが細部にわたってきつちりと描かれていて、歴史的な証言という点でも高く評価できる作品だ。

特別賞となった「浜辺のリズ」(藤本あずさ)は短い作

品で、一読しただけでは印象のうすいエッセーふうの作品と感じられたのだが、丹念に読み返すと細部が輝き始める。津波で飼い主を失った犬を保護して、老人を癒すセラピー犬としての訓練を受けさせるという導入部は、ただの犬の話ではないかと危惧されるのだが、やがて筋萎縮性側索硬化症という重病を負った女性と、犬を通じて交流するという展開になって、読者は改めてこの作品の重さに気づくことになる。言葉を話せない重病人と、物言わぬ犬との間に不思議な魂の交流のようなものが芽生えていく。そこまで読み進むと、この犬が津波という地獄を体験した生命であり、一方で身動きできないという業苦を負った患者がいて、そこに言葉を越えた何かが通じ合っていくということの不思議さが見えてくる。軽いエッセーと見えた短篇に、驚くほどの重いテーマが秘められている。

まほろば賞に輝いた「エリザベトを選んで」(蒔田あお)は冒頭の食肉加工の作業場で働くヒロインの姿がまず印象的だった。このようなオープンニングの小説は珍しいのではない。やがてこの女性の不幸な生立ちが語られて、なぜ彼女が食肉加工に従事するようになったかが明らかにされる。ふつうの女性らしい幸福には目もくれずに地味に生きようとする彼女の生き方に共感できるし、読者のぼくは傍観者にすぎないのだが、頑張って生き抜いてほしいと思わずにはいられない。だが作者はこの女性をさらに不幸な

境遇に導いていく。プロットのの一つ一つがリアルに描写されているので説得力があり、読者はこの女性に寄り添って不幸な境遇を追体験していくことになる。最後にわずかな救いとして、宗教的なテーマが立ち現れるのだが、下手に描くと理屈っぽく感じられる聖書の引用が、関西弁のいきいきとした会話とともに提出されるため、読者の胸に素直に入り込んできて、深い感動をもたらす。この作品に出会えてよかったと思わずにはいられない。



こはま きよし
1950 沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87 作家中上健次に師事、マネージャーを務めたかわら文学修行
88 「風の河」で文学界新人賞を受賞
他の作品に「消える島」「後生橋」「光の群れ」「火の闇」などがある

圧倒する力量と迫力

小浜清志

受賞作となった「エリザベトを選んで」 蒔田あおの作品は他を圧倒する力量と迫力で全員一致で受賞作となった。主人公土屋珠季と来栖陽平のかかなりの年齢差結婚からこの

作品は始まり、徐々にある方向へと崩れていくのであるが、その方法と表現には巧みな工夫が加えられており、自然と作品の世界へ引きずりこまれていく。

珠季が高校三年の七月に母と弟が無理心中するという事件が起きた。このことを機に珠季は罪を背負ったような生き方を選ぶ。食品会社の肉をスライスする女性労働者として暮らしている珠季は、同じような過去を持つ陽平と付き合い結婚式を挙げるのだが、式場の教会が重要な伏線となつてこの作品の重厚さにつながっていくのは見事である。十九才も年上であると妻と夫の不釣り合いは陽平が会社を得意先のスーパーの売り場マネージャーを殴る事件を起し、会社を解雇され三日三晩布団の中でふさぎこみそのあとふらりと家を出て一週間行方をくらませる。そこから崩壊が速度を増し珠季の病氣と相まって読むのも辛くなる展開がくり広げられる。陽平は父親という意識があまりなく珠季にもたれかかっているが、当の珠季はがんを宣告され生きる望みすら奪われようとするが、結婚式を挙げたときの教会の牧師との再会で宗教に頼っていくことで希望を見出すという結末になっている。年の差婚から不条理は広がり、坂を転げ落ちるような生活からキリスト教に救いを求めるという構図は少しあざといとは思ったけれども文章の力でここまで作りあげたのは見事である。

次に私が感銘を受けた作品は「白詰草」 西田宣子である。主人公の果林は現在七十五歳で三十五才の時から毎年県展に絵を応募しつづけている。絵の対象はバラや百合ではなく地味な草や花しか興味がわかない。そして、彼女の交友関係も地味である。知り合ってから四十年になる喫茶店「夢」の店主の須美は五十代で重一さんというパートナーを得て今でも現役で店をきりもりしているが、果林の娘の千夜にいずれは店をゆずるつもりでいる。重一さんは全国的にかなり有名な画家であるが果林は絵のアドバイスを一度も受けようとせず、毎年の応募作にはシロツメクサをしきつめた「白花」というタイトルであるが、その絵の中に三人の女を描こうとしている。大切な者たちを守り、着実に人生の時を過ごす草のような女の姿を果林は描きたいと思っている。十二月の半ばになって須美が倒れたという連絡を重一さんから受ける。もう八十才になる須美であるが果林は夫と共に病院にかけつける。入院のゴタゴタの中で果林は老いをより身近かに感じ、夫とも初めて納骨の事など話し合う。最後は孫である可奈の結婚相手に二人の親が反対をしているとの相談を受ける。ともかく相手の青年と会ってみることにして「夢」で会う日時を決めるところで終わる。この作品の良さはまず誠実である。どこを見てもどこに気を配ればいいかをきちんとわきまえていて清々しい。

「見返り」 佐藤文平も丁寧な筆致に好感が持てた。同期入所の三国民雄から思いがけない便りを受け取る。個人的な付き合いがあった訳でもなく、せいぜい年一回のOB会で顔を合わせるほどの関係でしかないが、上京する用があるので貴兄の都合のいい日に亡くなった奥さんに線香をあげに行きたいとのこと。桜井は亡き妻の遺影に手を合わせ手紙の内容を伝えると、なつかしいお名前ね、でも私たちが引き合わせた恩人にはちがいないから歓待してあげてねとささやかれた気がした。入所して十四、五年経験を積みと係長への昇進の話が出るが、三国は親が政治家ということので一番のりを果たしたと上司から知らされた矢先に二人で日帰りの出張に行くことになる。その帰り道三国の運転中に自損事故を起こしてしまう。すると三国は土下座までして桜井、お前がやったことにしてくれと懇願する。係長内定を取り下げられるかもしれない三国の頼みを桜井はしぶしぶ受け入れてしまふ。「その代わり、見返りは必ずきちんとさせてもらうから」と彼は言った。三国のその言葉はあてにしていなかったが、数ヶ月経って三国から手紙が届いた。それによると庶務課の細川菊恵さんから手紙でも打ち明けられたことだが、彼女は桜井との交際を希望しているとのこと。さり気なく映画にでも誘えばと答えたが、このことは彼女には内緒にしてくださいとのこと。手紙の通り映画の誘いを受ける。そして、二人の仲が深まり互いに

なくてはならない存在になる。そして三国から二通目の手紙が届いた。それによると細川菊恵から感謝の言葉があったとのこと、月下氷人のまねごとみたいなものですが、これで何とか収めてもらったら助かります、と綴られていた見返りとはそういうことだったのかと納得する。やがて二人は結婚し子供もできたが、妻はガンで先立つ。そして、三国との再会になるが、出張帰りの事故も菊恵を紹介したのも全て三国の思うつぼだったとのタネ明かしで終わる。それだけではなく、もう一工夫できなかったか残念である。「枯野」祖父江次郎も老年を描いている。武雄は妻の一周忌をすませてから猫の鳴き声を聞くようになった。玄関横のガラス戸に寂しげに猫の姿が映る。扉を開けると部屋をのぞいている。中に入れてアジの煮付けを出した。その日を境に猫は自由に出入りをするようになる描写を加えながら、老いた男の一人暮らしを淡々と描いていく。それはまさしく枯れた日々が続く枯野になるように見えてくる。スパーへ出かけいつもの椅子で世間を眺める老人の目にもう輝きはしない。だが、小堺という中学の同級生と再会してからは枯野に陽差しがあたるように武雄の生活も彩りを帯びてくるが、所詮は老人同志の行動であり会話である。競輪場の出入りをするようになってから武雄と小堺の間にかつてあった溝がなくなり孤独感もうすらいでいくが、小堺の死で枯野がふたたび広がっていく淋しさが襲ってきた。

「青山墓地の桜」萩原紫香は記憶に残る作品であった。戦後にはアメリカ兵と関係をもつ女性があちこちにいた。その一人である女性と知り合った私は毎日のように遊びに行っていたが、ある日汚い言葉を浴びせてしまう。幼いがゆえの配慮を欠いた言葉の後悔は時を経ても消えることなくまといつく。それから間もなくして彼女の飼っていた犬がわが家に来た。祖母が言うにはお姉さんは遠くへ行ったとの事。「私」はアメリカへ行つたものだと思い込んでいたが、その犬が死んだときに母から真相を知らされ、自分の吐いた言葉がどれほどお姉さんを傷つけたか後悔に苛まれる。お姉さんの自死は想像するだけで淋しい。

「浜辺のリズ」藤本あずさは、透明感のある作品である。東日本大震災の被災犬であるリズと、ALSという難病をわずらっている真由美さんと、飼われているハッピーという犬との交流を描いているが、暗い方へ流れるのではなく、むしろさわやかな展開が心地よく、作者の人柄がかい間見える気がする。

「血の湯」寺本親平は、透徹した観念の膨らみには脱帽するしかない。



いがらし つとむ
1949 山梨県生まれ
早稲田大学文学部文芸科卒
79「流瀉の島」群像新人長編小説賞
84-90 カンボジアを中心に東南アジアを取材「東南アジア通信」編集長
主著「緑の手紙」（読売新聞・NTT プリンテック「インターネット文芸」最優秀賞）・「鉄の光」「ノンちゃん、NONGCHAN／聖丘寺院へ」「破壊者たち」

芥川賞を凌駕する充実感

五十嵐勉

第一七回まほろば賞も中身の濃い作品が揃った。全国の同人雑誌から上がってくる優秀作品の読みごたえは、最近の芥川賞作品よりもはるかに充実感があり、凌駕する内質を有している。商業文芸誌の質的凋落と、文芸出版体制の衰微を、現状としてこれらの作品の前に感じるとき、文芸創作をどのように再構築していくべきか、考え直さずにはいられない。世の中にはもっと掘り出して広めるべき作品があり、共有すべき高いレベルの文学作品があることをあらためて感じた。

受賞作の蒔田あお氏の「エリザベトを選んで」は、特に重厚な作品で、運命の果てに痛に冒される緊迫感は、圧倒

的な迫力を備えている。少女期、障害を抱えた息子を連れて自殺し、自分を身寄りのない者として置いていった母の追いつめられた状況が、その時点で主人公の運命を決めたと同時に、のち自分もその同じ状況に陥っていくところに、この筆者の鋭く深い構想力が示され、文学造形の非凡な掘削力を感じる。普通は少女期と結婚期、子育て期とをこのように重ねない。しかし蒔田氏は、運命の苛烈さを描く手を緩めることなく、限界まで追い詰めていく。この烈しい収斂性は、生粋の文学者魂を示して、煌めいている。主人公が末期の膀胱癌で死ななければならぬその緊迫性の中に、教会で主人公を導く牧師も同じ末期癌で、この世界から消えていく運命の一つの同期性のうちに、救いを強くするが、そこにしか希望がない、この希求の強さに、作品の眩しい発光がある。時間が少し飛ぶ結節部分にいくらかギクシャクした流れの淀みも感じられるが、いずれこの筆者は逆にそれを長篇の新しい手法として生かしていくような、大きな可能性が感じられる。期待できる作家だ。

特別賞の藤本あずさ氏の「浜辺のリズ」は、寝たきりの重度の障害者を、犬の世話を媒介にして訪問ヘルプするストーリーだが、すでに言葉が喋れず、キーボードでの画面表示によって意思を疎通させるだけのコミュニケーションの新鮮さも新鮮で、それによって逆に内面や本音が露出する側面もあり、その斬新さは確かにある。しかしその奥深

いところは、結局肉薄でさず、むしろ犬によってある生物的な共感を響かせ合うに留まっている。救われているのは、津波で飼い主や家を失い、浜辺を彷徨っている犬の姿が、身体を失って生き物としての最低の生存のなかでの障害者の孤独感に重なってくるところだが、これは筆者の底にある優しさによってしつかりした基盤を得た、一種の迂回による成功となっている。そこに幸運な結節がある。しかし作者が今後どこまでこの世界を追求していけるかは、未知数である。

作品に漲る感情の一貫性では、萩原紫香氏の「青山墓地の桜」に深い痛切さを覚えた。戦後間もなくアメリカ軍の駐留部隊の米兵と親しくなったうら若い女性の悲劇に、まだ分別のつかない子供の立場から接したことによって、いつそう犠牲になった一人の女性の姿が鮮やかに浮かび上がってくる。当時アメリカ軍の駐留した場所がよく聞かれた話、よくあったことでありながら、ここまで鮮やかに人間として浮かび上がらせた物語には初めて接した気がした。これを読むといつまでもその女性の姿と、戦後の情景が胸深く残るだろう。その意味で、意義深い文学作品となったことに、拍手を惜しまない。

寺本親平氏の「血の湯」は、近年例を見ない超リアルリズムの異界譚である。普通の描写を一切捨てて、超現実の世界に直接入っていく切り込みは、呪術・祈祷の領域まで踏

「枯野」は、一人暮らしのわびしい老年を、猫などと慰め合い励まし合いながら生きる姿を描いている。まさに「枯野」の風景に重ねて叙述するその「さび」が、味わい深い。

以前は羽振りがよかった同級生が、今は凋落して競輪に狂い、やがてさらに追い詰められて自殺するという後半のストーリーが人生の終わりのわびしさを荒涼とした風景として、被せてくる。それはだれもがそこへ行く普遍的な道筋として、「枯野」を広がらせてくるところに、長い積み重ねと忍耐の技量を覚えた。

西田宣子氏の「白話草」も、画家として創作を続けてきた主人公が、老年という生を終える状況に近づいて、一つの軌跡の意味を問いかける小説である。この年になって初めて見えてくる風景が確かにある。それは老年のたわわな果実として、あらためて生を問う機会に恵まれる。その問いの前にどう答え、どう姿勢を整えるか、長い人生の終焉に臨んで、文学だけが持つ問いの深まりが、この作品にはある。他の身近な人々の人生模様を重ねてそれがさらに迫ってくる鮮やかさが、この作品の美点であろう。

同人雑誌には優れた作品がある。これらをどうたくさん読者に普遍化するか。文芸作品の表現手段や出版による流通は、現在大きな岐路に差しかかっている。優れた作品をどのようにすれば、多くの読者が手に取り、味わえるようにすることができるか——この課題をあらためて、七篇

み込む根源的な世界を浮かび上がらせている。我々の血の中に潜む、修羅や奇形や悲劇の深い流動の深淵を見せてくれる。生き物としての血の渦の根源を覗かせる描写は、日常の幕を暴いて、血の業としての合流を生命回帰の還流の姿で、宇宙の中に再生させていく。こういう世界が造形できるのは、何よりも筆者が薩摩琵琶奏者であり、平家物語に息づく戦乱の血の怨みを体感しているからだだろう。泉鏡花の系譜とも言えるこれは、筆者でなければ書けない世界であり、現代こういうものが忘れ去られていく時代趨勢の中では、特に貴重としなければならない緊要性から、「五十嵐勉賞」を贈った。

読者賞の佐藤文平氏「見返り」と、同じく祖父江次郎氏「枯野」は、どちらも晩年の世界を鮮やかに描いて、人生の終わりに見えてくる生の風景を呈示している。

「見返り」は、妻が死んでの数十年ぶりに訪ねてきた同僚の告白を聞くという設定だが、その告白の内容が実は妻がその同僚の前の恋人で、政治的欲得でその彼女を捨てて、主人公に乗り換えることを勧めて縁を持たせたというショッキングな内容である。これは同僚も末期癌で命は長くないことを前提にした、一生を振り返る告白であるだけに、起り得る人生最後の秘密の暴きでもある。老練で緊密な筆致は、晩年の衝撃的な告白を普遍的な生の振り返りに止揚している。読ませる文章には、高い技術を感じた。

の作品が突き付けてきていることを、感じさせる今回の選考だった。



なかがみ のり
1971 東京生まれ
ハワイ大学美術学部卒業
99「イラワジの赤い花 ミヤンマーの旅」(集英社)を上梓
同年「彼女のブレンカ」(集英社)
ですばる文学賞受賞
「悪霊」(毎日新聞社)「いつか物語になるまで」(晶文社)「夢の船旅—父中上健次と熊野—」(河出書房新社)「アジア熱」(大田出版)「シャーマンが歌う夜」(水の宴)・(集英社)「海の宮」(新潮社)「熊野物語」(平凡社)「天狗の回路」(筑摩書房)など著作多数

痛みと共に生きるという行為

中上紀

第一七回まほろば賞の候補作品は、いつもより多く七作品であった。選考会では、掲載順に一作一作選考委員が各自意見を述べていったが、熱く語り合ったその時同様に、掲載順に評を記すことにする。

西田宣子氏の「白話草」では、包みこむような文章が、高齢と言われる年齢に差し掛かる主人公、そして家族や友人、周りの人々の人間模様を、絵画に描かれる花になぞらえる。花はバラやユリのように華やかでも色鮮やかでもな

く、「田の畔や道端や河川敷などの地味な花」だ。主人公はそれをへそ曲がりだと言うが、清々しいほどに立派なそのこだわりは、本作を貫く一本の軸となっている。どこにでもあるような場所ですりそりと咲くシロツメクサを描く姿に、この人生はなんてことのない、どこにでもある人生なのだということが、だからこそ尊いのだということが、堂々と示される。絵の中に詰め込まれた他の登場人物たちの生き方も見逃せない。友人・須美の夫である重一は、アマチュアの彼女とは異なり、プロの画家としては華々しい人生を送ってきた。でも彼にも、屋久島の巨大杉のように描ききれないものがある。「描けるだけ誠実に書けばいい。書けるだけ誠実に書けばいい」という言葉が、小説の書き手である著者自身へのエールのように残る。

五十嵐勉賞を受賞した寺本親平氏の「血の湯」には、圧倒的な「語り」の力を感じた。読み手の心の奥底の繊細な部分に、語りかけてくるような作品だ。奇形で生まれて亡くなった子らの後を追うように死んだ妻を、男はどこまでも追っていく。さながら、日本神話で、イザナギが、蛭子神を産み火神を産んで亡くなった妻のイザナミを、黄泉の国まで追っていったように。琵琶の音色に誘われて、男はどんどん深みへと進んでいく。宿を訪れ、湯に漬かり、地底湖に吸い込まれ、岩屋へとたどり着く。それらのすべては血に塗れており、男は其中で悲惨な自身の過去と対峙

なった。そこで主人公は裕福だった小堺の破滅を目の当たりにしていく。武雄が味わっている日々の味気なさや孤独は他者とのかわりを避けて生きてきた自分自身を選び取ったものだが、だからこそ生々しく突きつけられ、人生とは、高齢になることとは、どういふことなのか改めて考えさせられる作品だった。

今回の候補作には、ペットを飼っている主人公が多かったが、この奇妙な共通点は、何かを意味しているのだろうか。河林満賞を受賞した萩原紫香氏の「青山墓地の桜」にも、ハナという犬が登場する。本作では、洗練された都会といったイメージの今の様子からは考えもつかない、戦後の麻布界隈の姿が、幼い女の子の視点でヴィヴィッドに描かれる。それはひと言で言えば、進駐軍の兵隊たちの姿であり、生きるために彼らを頼らざるを得なかった、女性たちの姿だ。女の子は、ハナの犬友達のペスの飼い主である「お姉さん」と親しくなるが、彼女もそんな女性たちの一人。最後に待ち受ける、絶望による悲劇はショッキングであるが、当時は珍しい話ではなかったのかもしれない。「あの人も戦死したのと同じことだよ」という、女の子の祖母の言葉が突き刺さる。戦争によって一番苦しんだのは、女性や子どもなどの弱者たちだ。そのか細い声を救い上げ、物語として伝えていくことは、小説の大切な役割である。

犬が出てくるもう一つの作品は、藤本あずさ氏の「浜辺

する。やがてその血は龍に姿を変えて天へと上っていく。あの世ともこの世ともつかない世界が、おどろおどろしくも幻想的に描かれた作品だった。これでもかというほど「血」が出てくるが、決して血なまぐさはない。琵琶の音の余韻が美しい。

「高齢者」の主人公が昔を振り返る、あるいは妻が亡くなる、というパターンが、今回の候補作には多かった。高齢になるということは、あの世への扉がほんやりとでも見えてきているということだ。故に、主人公たちは過去を振り返り、避けてきた痛みと対峙したり、愛した人との別れを思い出したりするのもかもしれない。佐藤文平氏の「見返り」で桜井が受け取った葉書に記された旧友三国からのメッセージは、まるで過去からの呼び声のようだ。妻子に愛想をつかされ、天涯孤独となった三国は、衝撃的な秘密を桜井に告げる。一方で桜井の妻菊江は、秘密を墓場まで持っていた。過去への向き合い方としては、どちらが潔いのだろう。深く考えさせられる小説だ。

祖父江次郎氏の「枯野」の武雄も、妻を亡くした高齢者だ。娘もとうに家を出、古い家屋で住み着いた迷い猫の世話をしながら細々と年金で暮らしている。することもなく、近くのスーパーに出かけて長居し、半額の弁当を買う毎日だが、ある日かつて自分をいじめていた裕福な同級生小堺と再会し、酒を飲んだり競馬へ行ったりするように

のリス」だ。主人公はセラピー犬のリスと共に、ALSという難病を持つ真由美さんの家にボランティアに行くようになるが、目しか動かすことの出来ない真由美さんの生命力が強く胸を打つ。真由美さんは「ちようのうりよく」で自身の犬であるハッピーと話が出る、リスとも「うみで」話したと言う。不思議なのは、真由美さんは、これらのことをベッドに備え付けのパソコンの画面に、目の動きでひらがなだけを打ち込んで表した。小説にも、その言葉通りの文字しか、記されていない。なのに、その限られた文字の間から、真由美さんの声がこぼれ出てくるような気がする。それが感動となって押し寄せてくる。リスは、震災で飼い主を亡くした犬で、ショックでひどい状態だったのを主人公が引き取った。人間が受けたのと同じ恐怖や悲しみを、あの震災で動物たちも受けた。だから、皆で一緒に幸せになろう、なるべきだ。そのようなメッセージも併せて伝わる、特別賞受賞作品である。

最後に、まほろば賞を受賞したのは蒔田あお氏の「エリザベトを選んで」である。本作には、宗教と、たくさん過去の抱えた女性、周りの人々の生き方が、二章に分けて重層的に描かれ、考えさせられる。第一章では、母と弟を心中で失い、高校卒業後精肉工場で働く主人公の珠季は、年下の相手と結婚するにあたり牧師から（結婚講座）を受けるが、聖書の言葉を学ぶたびに、過去の出来事が映像の



ように立ち現れる。言葉の一つ一つを噛みしめ、深く考える彼女の様子に、読み手も自身の過去を振り返りたくなる。第二章では、子を産んだ珠季が不治の病にかかる。若すぎる故の未熟さか、父親になり切れない夫は我が子を虐待してしまう。宗教を扱っているけれども、壮大な何かというよりは、ただ叫び出したいほどの痛みから解放されるために頼る場所としてそこに在る。彼女を心配し、就職を世話した高校の先生のように。やるせなさや痛々しさ、それでも生きるといふことの、強さと弱さが伝わってくる、受賞にふさわしい作品だ。

読めば読むほど愛着が湧く力作ばかりであった。



第17回まほろば賞選考会風景 2023.7.9 自由が丘「ハドル・スペース」にて